

ひとり歩き

竹村 沙智

自分で言うのもなんだが、私は箱入り娘である。といっても桐箱に入った果物のような高級感はずっとたくなのだけれど、今までの人生十九年間、箱に入って甘やかされていた方が楽だったのは事実である。だから、「ひとりっ子」であるが、独りには慣れていない。

そんな私だが、今年の夏は一人旅に出た。行先は釧路湿原である。初めての一人旅、初めての北海道。そのなかでも格別印象的だったできごとは、まっすぐに続く湿原内の道を二時間、ひとりで歩いたことだった。この場合のひとり、とは同行人はおろか、周囲にまったく人がいない、という意味だ。

時刻にして二時半から四時半まで。右手につづく山々の向こうを、だんだん日が傾いていった。日射しは十分強いのだが、空が高いといおうか、太陽が遠く感じられて、いつまでも少し胸が切なくなるような黄金色の光を放っているように見えた。道の両脇には、葦の草原が続いている。耳に聴こえるのは、どこからか水が滲みだして流れてゆく微かなせせらぎと、葦の間にびっくりするほど大勢棲んでいる茶色い小鳥たちのチツ、チツという短い笛の音のようなさえずり、そして風が葦を揺らす音だけだった。

この、風が渡る音というのが、想像をはるかに超えていた。決して止むことがないのである。例えるならば七夕の笹を揺らしたときのようなさやかな音、それが絶えず聴こえるのだ。歩いているうちに、先のほう三枚くらい、葦の葉はほとんどすべて同じ方向を指していることにも気がついた。はじめは遭難や熊の心配で頭がいっぱいだったが、次第に不思議な感覚にとらわれはじめた。大学に通い日常を過ごす私とはまったく別の私が歩いているような、それでいていつも一緒にいる家族や友達一人一人にこの景色を見せたいと強く思った。

私の息遣いが湿原に馴染んできたのか、歩いても小鳥たちが飛び立たなくなった頃に葦の草原が終わり、帰り道だとわかる木道が現れた。私は、そのとき一番、寂しいと感じた。